様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１３９２５

研究課題名（和文）学士課程教育の一環としての4年次教育における学びのプロセス

研究課題名（英文）Learning process in senior year education as part of undergraduate program

研究代表者
山田　嘉徳（Yamada, Yoshinori）

関西大学・教育推進部・准教授

研究者番号：６０７４３１６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：学士課程教育の一環としての4年次教育の学びのプロセスに着目し、大学教育の集大成とされる4年次教育はどのような意味で「集大成」なのか、その内実を実証的に検討した。(1)4年次教育における教授・学習環境を下支えする学習メカニズムの横断的検討、(2)初年次から4年次に至る学びの軌跡を明らかにする 縦断的検討、(3)4年次教育における学びのプロセスを体系的に理解するための理論的検討という3つの研究課題に取り組む中で、学習研究の視点から専門教育における学修と学業への意味づけの変容に迫ることができた。加えて、4年次教育における学びのプロセスを把握する方法を提案することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学位プログラムの最終段階で課される卒業研究は、大学の教育成果を把握する上で重要な位置づけが与えられているものの、学習者の学びの視点からその内実は明るみにされてこなかった。本研究では、卒業研究における学びの生態に接近する上で、社会文化的視点が有効となることを実証的に論じた。4年次教育における学習研究の理論的発展につながる視点を見出した点に、学術的意義が認められる。また学士課程における研究教育は国際的に重要性を増しているが、卒業研究を中心とした学びに着目した本研究の知見は、大学が社会に対しどのような意味でそれが「学びの集大成」と言い得るのか、検討の手がかりを提供できる点に、社会的意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：As part of the undergraduate curriculum, the fourth-year education is considered the culmination of university education. This study aimed to empirically examine the meaning of the fourth-year education as a "culmination" by focusing on the learning process. Three research tasks were undertaken: (1) a cross-sectional investigation of the learning mechanisms that support the teaching and learning environment in fourth-year education, (2) a longitudinal examination of the learning trajectory from the first year to the fourth year, and (3) a theoretical examination to systematically understand the learning process in fourth-year education. Through these investigations from a perspective of learning research, insights into the transformation of meaning and significance in specialized education and academic pursuits were obtained. Additionally, concrete methods for grasping the learning process in fourth-year education were proposed.

研究分野：教育心理学

キーワード：学士課程教育　卒業研究　卒業論文　4年次教育　高等教育　社会文化的研究　学習研究　モデル化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

学位プログラムの最終段階で課される卒業研究は、大学の教育成果を把握する上で重要な位置づけが与えられているものの、学習者の学びの視点からその内実は明るみにされてこなかった。本研究は、学士課程教育の一環としての 4 年次教育の学びのプロセスに着目し、卒業研究を中心とする学習研究の蓄積に寄与することを目指すものである。卒業論文等を授業科目として設けている大学は 9 割を超え、学士課程における研究教育については国際的に重要性を増しており、学問領域別に少しずつ蓄積が進んでいる。特に、一部の 4 年次学生調査の結果からは、卒業研究に取り組む目的について教員と学生との間で認識がずれていることが明らかにされており、こうした点に着目した学習研究がより一層求められる状況にあると言える。ただし、その具体的な方法については整備されておらず、学習研究の視点から検討が求められる状況にあり、方法論についても検討すべき課題となっている。

２．研究の目的

以上の背景を踏まえながら、本研究では、4 年次教育における学びのプロセスを体系的に明らかにする視点を提出することを目的とした。本研究では特に、4 年次教育の中でも卒業研究に着目し、(1)4 年次教育における教授・学習環境を下支えする学習メカニズムの横断的検討、(2)初年次から 4 年次に至る学びの軌跡を明らかにする縦断的検討、(3)4 年次教育における学びのプロセスを体系的に理解するための理論的検討という 3 つの研究を進めることとした。

３．研究の方法

(1)4 年次教育における教授・学習環境を下支えする学習メカニズムの横断的検討では、先行する 4 年次対象のアンケート調査研究の文献レビューから、縦断的なインタビュー調査のための視点の抽出を行った。(2)初年次から 4 年次に至る学びの軌跡を明らかにする縦断的検討では、異なる専門分野の学生を対象に、半構造化インタビューにより追跡調査を行った。さらに(3)4 年次教育における学びのプロセスを体系的に理解するための理論的検討では、得られたデータを手がかりに、社会文化的研究の知見と関係づけながら、卒業研究を中心とした学習研究のための方法論の提起を行った。

４．研究成果

まず、(1)4 年次教育における教授・学習環境を下支えする学習メカニズムの横断的検討については、卒業研究ゼミにおける教授・学習過程に焦点を絞って以下の点を明らかにした。多様で固有な卒業研究ゼミでの学生の学びを横断的に検討する上では、(a)講義形式の学びとの対比による、学生自身に経験される卒業研究を通した学びの諸形態の教授学習論的検討、(b)卒業研究にみられる協同による学びの身体論的検討、(c)ゼミを中心とする実践共同体にまつわる社会文化的検討、(d)卒業研究で扱われる知識との関連にみられる、学びの志向性に関する認識論的検討という 4 つの観点から整理できることを示した。

また、(2)初年次から 4 年次に至る学びの軌跡を明らかにする縦断的検討では、専門分野の異なる 5 名の学生を対象に、半構造化インタビューによる質的調査から、学びのプロセスを分析的に明らかにした。研究期間に生じたコロナ禍の影響もあり、十分な協力者は得られなかったものの、特にそのうち 3 名(社会科学系 2 名、人文科学系 1 名)については、継続的な追跡調査も可能となり、学習研究の視点から専門教育における学修と学業への意味づけの変容に迫ることができた。さらに、卒業研究での学びのプロセスについては、教員と学生との間にみられる認識のズ

レがこれまでにも指摘されてきたが、その内実を明らかにする上では、教員と学生との間にみられる相互作用の共変化過程を描写し、その様相を縦断的に検討することが有効であることを論じた。具体的には、卒業研究で維持・発展するゼミ文化を記号発生の観点から捉える文化心理学的アプローチを活かすことにより、卒業研究ゼミの変容過程における学びの様相を描けることを示した。その際には、近年発展のみられる、ヴァルシナー (Valsiner, Y.)の文化心理学的アプローチの適用可能性やレイヴ(Lave, J.)の状況的学習論において未検討とされていた教え手固有の位相の再定位を図るポスト状況派に関する理論も手がかりとした。

そして、(3)4 年次教育における学びのプロセスを体系的に理解するための検討においては、方法論的な観点から、4 年次教育における学びのプロセスを理解するのに、量的方法、質的方法を効果的に組み合わせ、その分析過程の統合をはかる混合研究法の知見に根差した方法を提案できた。一方、4 年次の学生の学びのプロセスにみられる多様性や個別性については、社会文化的な視点に根ざした、学生の学びの生態に接近する方法論の蓄積が一層必要とされることを議論できた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 山田嘉徳・上畠洋佑・山咲博昭・谷美奈・山路茜・西野毅朗・服部憲児	４．巻 43(2)
２．論文標題 「コロナ禍における学生の学び」質的調査の振り返りから考える質的研究の要点	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大学教育学会誌	６．最初と最後の頁 134-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田嘉徳・上畠洋佑・森　朋子・山咲博昭・谷　美奈・山路　茜・西野毅朗・服部憲児	４．巻 42巻2号
２．論文標題 大学教育における質的研究の多様な展開	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大学教育学会誌	６．最初と最後の頁 103-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田嘉徳・今中舞衣子・中山英治・藤岡克則・中原　翔・藤岡芳郎・山田耕嗣・榎　真一	４．巻 41号
２．論文標題 アクティブラーニングを対象とする授業づくり支援に向けた一考察―相互研修型FD理念を手がかりとして―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大阪産業大学論集	６．最初と最後の頁 19-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 IWASAKI,Chiaki, TADA, Yasuhiro, FURUKAWA, Tomoki, SASAKI, Kaede, YAMADA,Yoshinori, NAKAZAWA, Tsutomu, IKEZAWA, Tomoya	４．巻 14(2)
２．論文標題 Design of e-learning and online tutoring as learning support for academic writing	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Asian Association of Open Universities Journal	６．最初と最後の頁 85-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1108/AAOUJ-06-2019-0024	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 本田周二・紺田広明・三保紀裕・山田嘉徳・森朋子・溝上慎一	4．巻 41(1)
2．論文標題 授業内の他者との関係に対する認識がアクティブラーニング型授業における外化に及ぼす影響	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大学教育学会誌	6．最初と最後の頁 88-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森朋子・山田嘉徳・上畠洋佑	4．巻 41(2)
2．論文標題 質的研究を考える―学生、教員、職員の学びと成長を捉える学習研究の手法として―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 大学教育学会誌	6．最初と最後の頁 57-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山田　嘉徳	4．巻 40(1)
2．論文標題 アクティブラーニングの効果に寄与する要因の質的検討―アクティブラーニング型授業を展開する教員へのインタビュー調査から―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 大学教育学会誌	6．最初と最後の頁 33-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 山田嘉徳・上畠洋佑・森　朋子・山咲博昭・谷　美奈・山路　茜・西野毅朗・服部憲児
2．発表標題 大学教育における質的研究の多様な展開
3．学会等名 大学教育学会第42回大会
4．発表年 2020年

１．発表者名 山田嘉徳・関田一彦
２．発表標題 大学教員が抱く授業観の探索的検討―質問紙調査から見えてきた課題―
３．学会等名 大学教育学会第41回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 森朋子・山田嘉徳・上畠洋佑
２．発表標題 質的研究を考える―学生、教員、職員の学びと成長を捉える学習研究の手法として―
３．学会等名 大学教育学会第41回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 村上祐介・高木悠哉・栫井大輔・柴恭史・竹橋洋毅・山田嘉徳
２．発表標題 教員養成における「学び続ける教員」育成プログラムの展開（1）―インプリシット知能観への介入を見据えた予備的検討の成果―
３．学会等名 日本教育心理学会第61回総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 本田周二・溝上慎一・森朋子・三保紀裕・紺田広明・山田嘉徳・上畠洋佑・坂田充範・西村雅永・福迫徳人
２．発表標題 高校生の学びと成長（1）―学びのタイプによる資質・能力の違い―
３．学会等名 日本教育心理学会第61回総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山田嘉徳・今中舞衣子・中山英治・藤岡克則・藤岡芳郎・山田耕嗣・榎真一
２．発表標題 相互研鑽型 FD 研修の可能性をめぐる一考察―大阪産業大学 FD セミナー「アクティブラーニング実践交流会」を題材として―
３．学会等名 第26回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2020年

１．発表者名 関田一彦・山田嘉徳
２．発表標題 大学教員が抱く授業観の探索的検討―授業改善に対する実態と大学観に関する認識を中心として―
３．学会等名 第26回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2020年

１．発表者名 山田　嘉徳
２．発表標題 学習資源の利用経験の差異からみるラーニング・コモンズにおける学びのプロセス
３．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yoshinori Yamada
２．発表標題 Reverberated dialogue to understand the senpai/kohai system
３．学会等名 International Society for Cultural historical Activity Research 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 山田嘉徳
２．発表標題 PBL型授業における学びのプロセスの検討―初年次基礎教育と2年次専門教育との比較から―
３．学会等名 日本心理学会第81回大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計5件

１．著者名 （著者）ダグラス・L・メディン、メーガン・バング、（訳者）山田嘉徳	４．発行年 2021年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 360
３．書名 その問いは誰のものか―先住民の科学・西洋科学・科学教育―	

１．著者名 水野治久・串崎真志（編著）	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 200
３．書名 教育・学校心理学―子どもの学びを支え、学校の課題に向き合う	

１．著者名 山田　嘉徳	４．発行年 2019年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 224
３．書名 大学卒業研究ゼミの質的研究―先輩・後輩関係がつくる学びの文化への状況的学習論からのアプローチ―	

１．著者名 木戸 彩恵、サトウ タツヤ	４．発行年 2019年
２．出版社 ちとせプレス	５．総ページ数 304
３．書名 文化心理学	

１．著者名 田中俊也	４．発行年 2017年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 212
３．書名 教育の方法と技術―学びを育てる教室の心理学―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関